

【テーマ】

□ 人の世は泡沫のようなもの

～深い思索と教養を有していた万葉びと～



公民館だより

2018年8月29日(水)

番外編・第6号

奈良市生涯学習財団 二名公民館

館長 上田善紀・発行

■ ロボットは東大に入れるかーというAI（＝人工知能）のプロジェクト「東ロボくん」が開発されるなど今やAIの時代が到来、数年単位で文明の水準が飛躍的に進歩しています。ゆっくりとした昭和時代を懐かしむシニア世代の声が聞こえてきそうです。昭和時代でさえ時代遅れの平成終末の現在です。上代、奈良時代の人々の考えなんてたかだか知れたもの：なんて思っている御仁！ちよっと待ってください。知識や研究力はさておき、思考の深さといった精神面はどれほどであったのでしょうか。

天理市樺本町の和爾下神社付近にあったとされる柿本寺。そこで誕生したといわれている（*諸説あり）のが歌聖・柿本人麻呂です。

巻向の山辺とよみて行く水の水沫のごとし 世人我等は

柿本朝臣人麻呂 卷七―二二六九

㊦ 巻向の山辺を響かせて 流れていく川：その川面に浮かぶ水の泡のよ
うなものだ この現世に生を受けたわれわれは

桜井市にあるご存じ大神神社のご神体こそが三輪山（467 m）です。あまり知られてはいませんが、その奥に巻向山（567 m）があります。かつて古代の出雲族が居住していたといわれている山です。現に、麓には「桜井市出雲」という地名があります。その巻向山北麓を源流として流れるのが巻向川です。その巻向川が山間をとどろかせて流れていくと歌っています。現在の巻向川は飛び越えられる程度の川幅となっておりますが、当時はさぞかし豊かな水量の流れを呈していたことでしょう。

● 「人の世は泡沫のようなものだ」

この世に生きているわれわれは、山川の激流に生じる水の泡のようなものである――というのです。鎌倉時代の名著『方丈記』に見える仏教の無常観にも通じる人生の感慨がこの歌にはありますね。山川を行く水の泡を見て、飛鳥時代の人麻呂さんは人生のむなしさを思ったのです。人の世は泡沫のようなものだと無常を観るのには、すでにして飛鳥時代のこの頃には中国から伝わった仏教思想の影響があったと考えられます。柿本人麻呂がもしも現代に生きているとすれば、著名な思想家となつていふことでしょう。

●「人生とは、すぐに消え去っていく航跡と同じ」

柿本人麻呂という有名な歌人の次に、上級官人の歌を紹介しましょう。沙弥満誓さん。大宰府の役人で歌人の大伴旅人とも交遊した仲でした。その一方、在家の僧でもありました。「沙弥」とは仏門に入り剃髪はしていても妻子のいる在家の僧のことです。その沙弥であった満誓さん。俗名は笠朝臣麻呂といいました。

世間を 何に喩へむ 朝開き 漕ぎ去にし船の 跡なきがごと

沙弥満誓 卷三―三五―

世の中を 何にたとえたらいいだろう 港に泊まっていた船が 夜明けに 漕ぎ去ってしまったあとには その航跡すら残らない 人生もそんなもの なのかなあ

この歌もまた、仏教の無常観を色濃く反映したもので、中世の和歌にも大いに影響を与えた万葉歌として知られています。船の航跡が消え去っていくことに、自分たちの人生のはかなさと重ね合わせているのですね。

実は、721（養老5）年、元明上皇の病気に際して、母親であった元明上皇の平癒を祈るために女帝・元正天皇の命を受けて男女100人が出家を命じられて「沙弥」となりました。しかし、かainく元明上皇が亡くなったことで祈禱による病氣快復ができなかったとして、なんと沙弥たちは処罰されました。満誓さんも左遷させられたということです。

●農民の教養も高かった―中国の故事を踏まえた農民の歌

常陸指し 行かむ雁もが 我が恋を 記して付けて 妹に知らせむ

物部道足 卷二十一―四三六六

故郷の常陸を目指して行く雁はいないのだろうか。私の恋心を書き記して妻に届けてほしいものだ。

物部道足さんは755年2月、常陸国信太（霞ヶ浦付近）から筑紫国（福岡県）に派遣された防人。防人が旅の途上、または任地で故郷に残した妻へ思いを雁に託すという、特にどうってことのない歌です。しかし、この歌には深い教養が隠されているのです。

中国の正史の一つ「漢書」に、匈奴（遊牧民族、フン族）の捕虜となった蘇武が、雁の脚に手紙を付けて漢の帝に便りをしたという故事から生まれた「雁の使い」があります。その「雁の使い」という故事を踏まえて歌を作った物部道足さんは、相当高い教養を持っていたことがうかがい知れます。常陸国の人々は、筑波山麓で歌垣などを通じて歌を詠み合う習慣が根付いていたことも『常陸国風土記』からわかっています。ひよつとしたら物部道足さんは、歌垣での交流の中でこの故事を教わったのかも知れませぬ。